

なく、お渡しは申したなれど、是まで左程の不自由なく、手許で育つたあの娘、いま此體を見るに付け、余は不便に堪兼まする殊には妻の阿定には、彼娘に別れた其時から、三度の食事もろくろく致さず、泣の涙で暮す仕合せ

阿定「お前さんの頼みを聞入れ、阿兼を渡した夫の了見、あまり無慈悲じや一刻じやと、勿體ないがきつう恨み、嫁入してから廿餘年、ついしか知らぬ夫婦いさかひ、今度はじめて致したも、耻しながらあの子ゆゑ

勝田「わしも口では言はねども、其實胸が一杯に成りました、夫からして此五六日と云ふものは、貴公の住所の東京中、探して見ても知れぬが道理、田中峯楠と云ふたが假名、松本田宮と云ふ仁と知れたは今日の阿兼が使

阿定「日の暮るよを待兼て、兩人が是へ参つたは、一旦あなたの言條たてよ、お渡し申した娘の阿兼、今改めて夫婦のものへ、養女にお貰ひ申さんため  
勝田「年ごろ人に手を下けて物を頼まぬ文之進夫婦のもの、コレ此通り、二人とも両手を下けて頼みまする

阿定「田宮さま、二人が心を推置して、お聞なされて下さりませ

淨「理つきたる頼みの詞、田宮は何といらへ無く、差うつ向て居たりしが、何思ひけん勝田に向ひ

松本「情にあまる其お詞、何にも承知は致しませうが、差向て一ツの御無心、實は唯今此場にて差迫つたる金子の入用、何共以て恐縮ながら、金子五十圓拜借が願ひたう御座りまする

勝田「ハテ何の御用かと存じたら、五十圓の御用立、お安い御用、五十圓は愚な事、何程でも差出さう  
淨「持たせし紙を押明て、取出したる五十圓、田宮が前へ差出せば

ト勝田は執事が持参のカバンより、札の束を澤山に出し、其中より五十圓を田宮に渡せば  
松本「早速の御承知、有がたう存じます。サア宮川さん、御手附の五十圓、是と合せて五百圓、たしかに唯今御渡し申す、是で言分は御座りますまいな?

宮川「ナニさう御勤當に成さらずとも宜しいに、イヤ夫では金子槌に受取た  
松本「然る上はこれなる勝田の阿兼どの、無理無體に連ゆかう、女房に仕やうとは、仰しやるまいな?  
宮川「コレサ松本、又しても左様な戯談、この宮川正武が、いつ左様な事を申したか、イヤやくたいも無き出放題

阿兼「それでも宮川さん、あなたは私が手を取て、引立やうとはなされましたに  
宮川「コレサ〜阿兼さん、さう戯談を眞に受ては、甚だ以て迷惑いたすよ

松本「ハ、ハ、ハ、御迷惑とあらば申すまいが、時に宮川さん、此田宮は貴所様と先年よりの懇意ゆゑ、今改めて忠告いたすが、一體御身は官員紳士に似合ぬ心底、この東京に御座つては、却て御身の爲に成まい、御身が拙者の悪事をば、告訴なさると其前に、事に寄たら拙者から、御身の非道を一々に告訴しやうも知れぬもの。じやに由て唯今の内辭職なし、身を引かるゝが安全と、此田宮は存じますね

淨「底意をこめたる意見の詞、聞くに宮川頼ふくらし  
宮川「ヤア入らざる貴公の忠告だて、辭職しやうと退身しやうと、それは手前の好自由、餘計な事を聞くに及ばぬ

淨「しつぺい返し返しの挨拶も、故こそあらふと聞答め

勝田「様子ありけな其問答。シテ葛藤の仔細と申すは？

松本「尾羽うち枯した浪人でも、原は山ある武士の果、あちらからして秘密の封じめ、切つて開かぬ其内は、口外せぬが男の義理、ナ、ト宮川さん、左様なものでは御座りませぬが。扱勝田様お二

方、仰せに従ひ是なる阿兼、差上まするで御座りませう、是迄通りお二人様、どうぞ御不便加へられ、御養育を願ひまする

勝田「早速の承知 忝ない。然らば先日申せし如く、貴公へ見繼の二千圓、御受取下さるか？

阿定「それとも屋敷へお住居あつて、阿兼が介抱、お受けなすつて下さりますか？

勝田「いづれなりとも二様の中

阿定「お望次第に致しませう

松本「有がたうは御座りますが、兩様ともに望で御座らぬ

皆々「エ、

淨「思はぬ田宮が望みの詞、阿兼はわつと泣出し

阿兼「縁切てとはお情ない、現在まことの父上と、親子の縁を切ると云ふ、悲しい事がありませうか、夫ばかりは父上さま、思ひ止りて下さりませ

淨「頼みますると手を合せ、伏拜たるいぢらしさ、阿定も俱に差よりて

阿定「いかにも阿兼のいやる通り、親子の縁は切らなくても、外に工夫がありません、コレ申し田宮様、阿兼が心を配分て

浄「縁を繋いで俱々に、行末くらしして玉はれと、娘が心思ひやり、頼むも母の情なり、勝田ははたと膝をうち

勝田「ム、阿定、よく申した。コレ田宮どの、娘が悲み妻の嘆き、其心中を推察して、余が勸に従つて、承諾しては下さらぬか？」

浄「誠を盡す情の詞、さすが田宮も辭し兼て、案じ煩ひ居たりけり、事の敗と宮川心せき立て宮川「アイヤ勝田様、それなる田宮、阿兼殿には實の父か偽りか、實否はしかと存せねど、彼奴は正しく人殺の大罪人、その娘を貰つては、勝田のお家に瑾が附く、それ御承知で御座りまするか？」

阿定「ナニ田宮さまが、人殺の罪人とな？」  
宮川「去る五月十三日の夜、青山墓地の道ばたで、聞ゆる壯士の杉山猛夫、たゞ一刀に斫殺し、其場を去つたは松本田宮、この正武が慥な證人  
皆々「エ、

浄「驚く中に松本田宮、押入明て取出す一刀、抜より早く肌おしぬぎ、ぐつと突立て引廻す、覺

悟の自殺に人々は、こは何故に切腹と、介抱するを押止め

松本「お願あるな各方、宮川どのの言はれし如く、男の意地の言掛り、而皮に拘はる一儀の爲に、人を殺した此田宮、大罪人に相違御座らぬ。それは兎もあれ阿兼殿の身について、田宮が今際の懺悔はなし、事永くともお聞下され

折柄聞ゆる隣りの尺八聞ゆる、勝田中村の人々は、田宮に腹帯を占めさせ介抱なせば  
松本「此田宮は元旗本の武士のはて、千葉縣の平民田中新兵衛と相名乗り、詞巧みに言こしらへ、ついに連出し參つたは、餘儀無く人に頼まれて、謀りおふた騙の手段、實の親では御座りませぬ  
皆々「エ、

阿兼「それじやと申して此通り、亡母上のお書置き、田中新兵衛が妻つなとは假の名、誠は松本田宮が妻せいと書て御座りまする

浄「取出し見する以前の書置、人々それはと集まりて  
中村「實に松本田宮が妻せいと書たる女の手跡

浄「打より俱に讀下す妻が今際の書置を讀ませもはてず、手負はすりより、奪ひ取り  
松本「無用の書置、御覽に入れては阿兼殿の身の不爲、勝田のお家に瑾がつく、どこまでも阿兼殿に

新作夜の端

は田中新兵衛の娘、この松本田宮こそ、利慾に迷つて悪事に與し、實父とかたりし不埒もの、かく白状の上からは、唯今までの罪科はお許しなされて下さりませ、夫につけても妨なるは此書置、今はの際に妻の手紙、かう致せば夫婦同體

淨「剛氣の田宮は痛手をしのび、我と手づから一通を、臍腑の中に押込で、片息まさる大苦痛、何思ひけん、宮川は、田宮が側に走りより

宮川「一旦誓ひし詞を守り、死る間際に至るまで、此宮川に頼まれたと、一言いはぬ丈夫の義心、いで某と俱々に、冥途の旅の道づれ致さう

淨「手負の刀に手を掛れば、手負は其手をしつかととらへ

松本「そりや無用じや、宮川殿、たとひ貴殿が隠されても、人殺しの大罪は、必らず露顯いたすもの、又貴殿には此田宮、頼まれた事たつて無い、無益の犬死いたされなよ

宮川「ム、それ程までに貴殿の義心、それに背くは却て不本意、然る上は辭表は後で差出し、此場よりして身は出家、田宮の名前を申受け、田宮法師と名をかへて、貴殿の菩提を吊うて、責て此身の罪じし

松本「出来された宮川殿、一命絶る其時は、恨も無ければ仇も無し。これ勝田殿。田中新兵衛の娘と

あれば、阿兼どの、憚り無く御養女に

勝田「承知いたした、原の通りに勝田が娘

阿定「わたしが爲には實の娘、必らず心をお残しあるな

松本「有がたい、モシ阿兼殿、勝田様御一方の、生にも優る御高恩、かならずお忘れ成されますなよ

阿兼「お父様の御遺言、心にこたへて居りまする

勝田「アツ有爲轉變の世の中に、子で子にあらぬ浮世の義理

阿定「明けて言はれぬ身の素性、言はぬは言ふにますらをの

阿兼「慈愛の情か、闇の夜に、鳴かぬ鳥の聲聞けば、生れぬ先の親の恩

松本「われはそれに引かへて、子ゆゑに迷ふ夜の鶴、隣に聞ゆる尺八の

宮川「普鈴の暮露にあらねども、形見の笠に世を忍び（と田宮の編笠を持つ）

中村「哀別離苦の旅出も、跡の始末は信夫が役目

松本「お去らば

宮川「さらば

淨「修行の門出断末場、無常を告る鐘の聲、いととさびしき冬空に、あはれ果なき夜の鶴、啼

音を残して

ト松本の臨終を人々おがみ、宮川は修行の旅に上る (幕)

附言

此稿を印刷に附したる後○序幕(二)に於て阿定が孩兒を誤りて我娘と思へる所の出は發狂の體にて花道にて心の亂れたる様を演じ次に孫兒を抱きたる所に勝田文之進の出来るを見て幽霊と思ひ誤り走り入る事に訂正したり其(三)の冒頭に於て阿定は病床の上に在りて小澤醫士の説諭を聞ける所に勝田入來りて漸く其本人たる事を知り狂氣も此喜の爲に鎮まれる事に訂正したり

此序幕旅館の主人を木暮武太夫と書たるは小栗宇太夫の誤なり併せて是を正誤す

○第二幕の(三)青山墓地の黙りに成て蕪頭の銀兵衛を出たるは別に趣向有ての事に非ず所謂粉色の爲たるに止れば其存廢は場の上の都合たるべし

○第三幕の(三)阿兼が中村の水着を疊む事に作りたるが再考するに水着は疊める物に非ず且この場にて中村阿兼兩人の情愛に關る動作科白とも十分ならず依て水着に代るに雑誌の諸册(太陽)を以てし會て連載したる居士が著作の「あはれ浮世」の話に涉り其編中の人物に附托して兩人が

戀愛の趣をも言はせ又阿兼が宮川を思ひ嫌へるの意をも現はす事に訂正したり

○第五幕の(二)に於て宮川が入來るを見て阿兼は隠るゝ事に成し愈々談判切迫に至りて出來り決心して宮川に連往れんと云ふ事に訂正したり且勝田と阿定が來る所も此兩人に止め儘に車夫を案内に召連たる迄にて餘人を同道せざる事に訂正したり

此餘訂正の庶々猶あるべし讀者諸君開場の日に於て是を知り玉ふべし

著者再識

櫻癡全集上編終

明治四十四年十二月二十日印刷  
明治四十四年十月二十日發行

著作權所有

櫻癡全集上編

編者 齊木寬直

發行者 大橋新太郎  
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 河合辰太郎  
東京市下谷區二長町一番地

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場  
東京市本所區本町四番地

發行所

(東京市本區丁)  
日本橋三丁目

振貯口東(○)  
替金座京(番四) 博文館

定價 金壹圓貳拾錢

故福地櫻癡居士著作

(博文館發行)

# 櫻癡全集

各冊定價金壹圓貳拾錢

小包料各金八錢

全三冊三六列上製  
新鐫ポイント活字  
印刷鮮麗頗美本

(各卷收載目次)

上編 (既刊)

あはれ浮世—東鑑拜賀の  
卷—小楠公脚本—關原響  
凱歌—女俠駒形おせん—  
喜劇二人袴—芳哉義士聚  
—扇の恨—平野次郎—求

女塚身替新田—新作夜の  
鶴

中編 (既刊)

人生X光線—斬奸—  
滑稽小説花懺悔—廻る  
因果—女浪人

下編 (近刊)

偽稱紳士—色慾二筋道  
—滑稽小説陰陽大和錦  
—車善七—仙居夢  
—出放題—烏居甲斐  
—高島秋帆

山崎紫紅君著

(博文館發行)

# 史劇十二曲

正價金九拾五錢 郵税金八錢

全一冊四六列上製  
寫真版數葉挿入  
紙數五百四十頁

最近二年間に於ける著者勞作の結晶物なり。上場せられて都下の劇壇を賑はしたる  
歌舞伎物語。その夜の石田。亂れ笹。松一木。信玄最後。當流鉢木。破戒替我。外

に明智光秀。戀の洞。三七信孝。その他二篇を収めたり、著者の脚本は所謂机上の臺帳に  
あらず、如かにもまた清新の氣ありて眉俗の態なし、劇に志ある諸君一讀を乞ふ。

土居春曙君譯

(博文館發行)

新社會劇

全一冊 菊判

總シロース上製美本

紙數三百四十一頁

正價金六拾五錢

小包料金八錢

本書は勝利三幕滑稽四幕遺言一幕空想三幕の四篇を収む。本書は著者が登場の経験により直ちに實演に適せしむべく少からざる苦心と用意とを以て執筆せるもの。本書は新社會劇を研究せんと欲する初學者に取りては唯一の新階梯たるを以て苟も劇に志ある者本書に依りて私演期間に發明せらるべし。

博文館編輯局編

脚本傑作集

(全一冊)

正價金七拾五錢

小包料金拾貳錢

文學士 小山内薫君著

(博文館發行)

演劇新潮

全一冊 四六列美本

正價金五拾五錢

郵税金六錢

俳優は讀め！ 興行主は讀め！ 好劇家は讀め！

この書は學問の書に非ず、議論の書に非ず、研究の書に非ず。舞臺の組織より、俳優の技藝に及び、俳優の技藝より脚本の解剖に及び、演劇一切の實際的新思潮を平明なる文章をもて叙せる趣味の書なり。年若き著者が醇熟たる演劇革新の心願は十數葉の美しき挿畫と共に此書の紙間に收めらる。



中村春雨君著

(博文館發行)

最近歐米劇壇

正價金壹圓 郵税金八錢

全一冊四六列上製  
裝釘清楚美本  
寫真版數葉挿入

劇壇革新の時機は迫れり、此際斯界に新活動を試みつつある著者は、其既往三年有半の間、歐米に遊びて専ら劇壇の研究に従事し、獲たる處の智識と見聞とを擧げて本書を出す、イッセン、シヨウ、ハuppトマン、ウエデキンド、ストリンドメル等の舞臺的觀察を始め獨逸、英國、露國、佛國、米國、希臘等の劇界及び文藝界の最近の消息を傳へて、趣味と研究と兼備はる、苟も劇壇に志ある人は勿論、世間一般の社交界と家庭とに切に一讀を薦む

小栗風葉君外十一君作

(博文館發行)

小十人集

正價金八拾五錢 郵税金八錢

全一冊菊列上製美本  
紙數四百二頁  
三色版口給挿入

執筆せる處のものは皆之れ當代の名士、收むる處、十二篇、各々會心の佳汁ならざるはなし、紅紫錯綜、金碧相映じて、當に是れ名花十二客の妍を競ひ、麗を競はすにも似たらんか、爰に盛装して江湖の清鑒を俟つ

樋口一葉女史著

一葉全集

(全一冊)

正價金四拾錢  
小包金八錢

島崎藤村君著

(博文館發行)

小説 藤村集

全一册四六判上製  
體裁瀟灑美本  
清方君挿畫十四葉

正價金七拾五錢 郵税金八錢

内容

黄昏—並木—壁—收穫—一夜—伯爵夫人  
苦しき人々—旅—群—青年—死—弟子  
土産—雜貨店—奉公人—河岸の家—芽生

吉江孤雁君譯

ツルゲー子フ集

(全一册)

正價金四拾八錢  
郵税金六錢

田山花袋君著

(博文館發行)

近作十五篇

全一册四六判上製  
體裁清楚頗美本  
邦助君挿畫十四葉

正價金七拾五錢 郵税金八錢

内容

拳銃—寫眞—鐘—二階の間—町より山へ  
庖丁—良—幼—兒—一家の主人—騎兵士官  
父の墓—丘の家—竹馬の友—死—二人づれ

小松月陵君譯

沙翁物語十種

(全一册)

正價金四拾五錢  
郵税金六錢

巖谷小波君 共輯 故 川上眉山君遺著 (博文館發行)

### 眉山全集

全四冊菊判特製紙函入  
表紙桂舟畫伯意匠  
紙數一冊八百五十頁

正價各冊金壹圓八拾錢 全部金六圓廿錢 小包料各金拾貳錢

幽艶にして清廻なる眉山氏の筆は、眞に明治の華文なり。況んや其想、おのづから當代の重きをなして遺傳として迫らざる所、我文壇の重鎮たり。今や斯人亡くして其著作單り金聲玉振の響を傳ふ本書に收めたる諸篇は、孰れも當世文壇をして、眉山氏が絶倫の盛名を擅にじたるもの、實に之れ我讀書界に於ける珍璧にして、而して又明治文壇に異彩ある天作家が面影なり。

故國木田獨歩君著

(博文館發行)

### 獨歩全集

全二冊菊判特製紙函入  
表裝高雅紙質精良  
紙數各冊八百頁

正價各冊金貳圓 小包料各金拾六錢

獨歩の作品は文壇覺醒の第一聲なりき。眞實にして熱誠なる内容はもとより言はず、その形式に於ても、その描寫に於ても、優に時流に超越せるは世既にこれを知れり。蓋し明治文壇に於て稀に見るの天才にして其作品時に漸越にして悲憤、時に閑雅にして瀟灑、或は清雋なるあり或は奇峭なるあり、千態萬狀、眞に人をして人生活畫圖の眼前に迫り來れるを覺えせしめずんばあらず。今、獨歩全集成る、座右の友として致てこれを大方の諸君に薦む。

永井荷風君著

(博文館發行)

あめりか物語

全二冊四六判體裁  
瀟西三九〇頁  
正似金六拾五錢  
郵税金六錢

内容

○船室夜話○野路のかへり○岡の上○醉美人○長髪○春と秋○雪やどり○林間  
○悪友○舊恨○寢覺め○夜の女○一月一日○曉○市俄古の二日○夏の海○夜半  
の酒場○落葉○支那街の訛○夜あるき○八月の夜の夢○附録 フランスより  
○船と車○ローン河のほとり○秋の巻

田村松魚君著

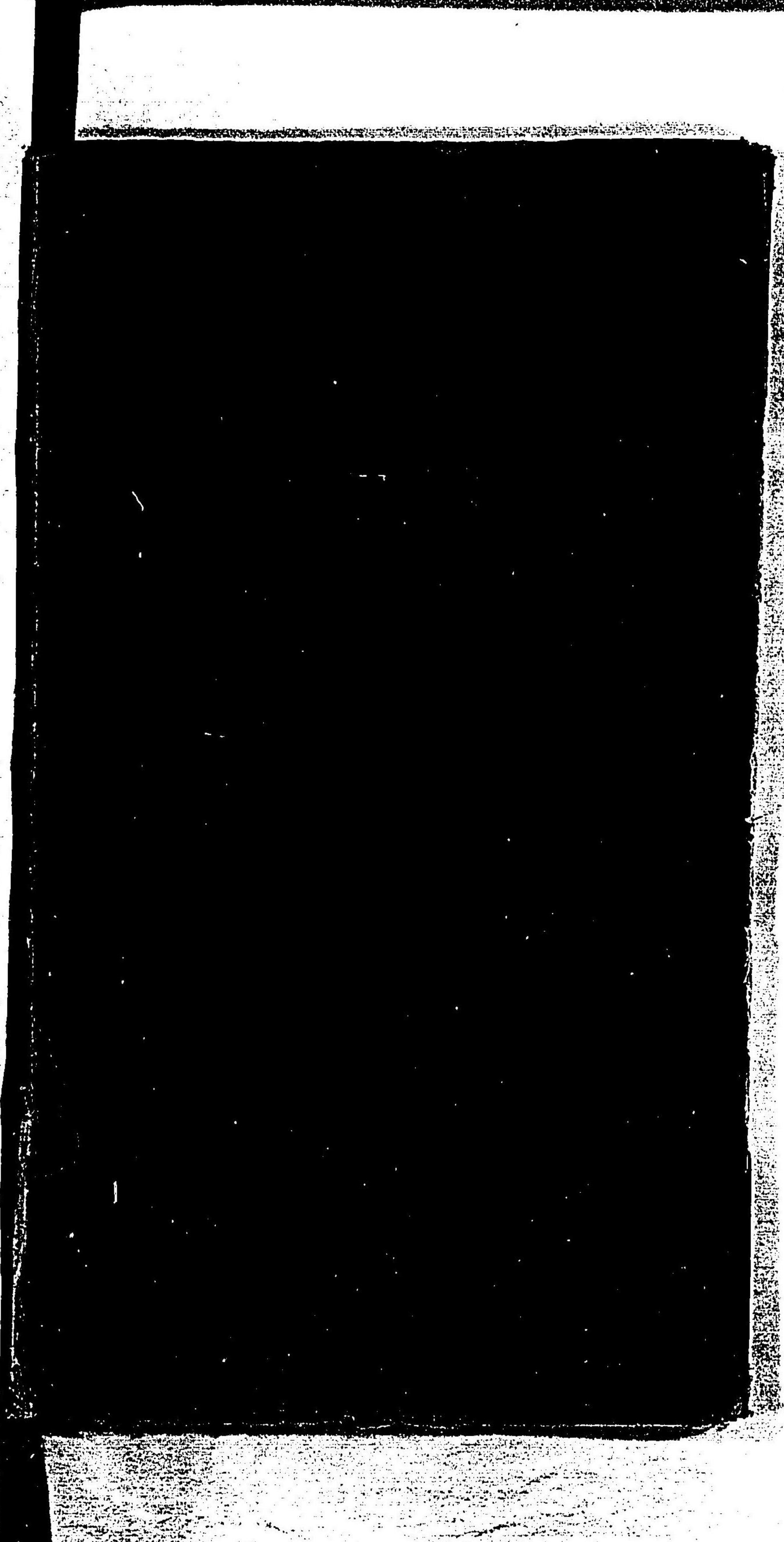
北米世俗観

(全二冊)

正似金參拾五錢  
郵税金四錢

3/

35  
244



084859-001-4

35-244

桜痴全集

福地 桜痴/著

M44-45

DBB-0011



